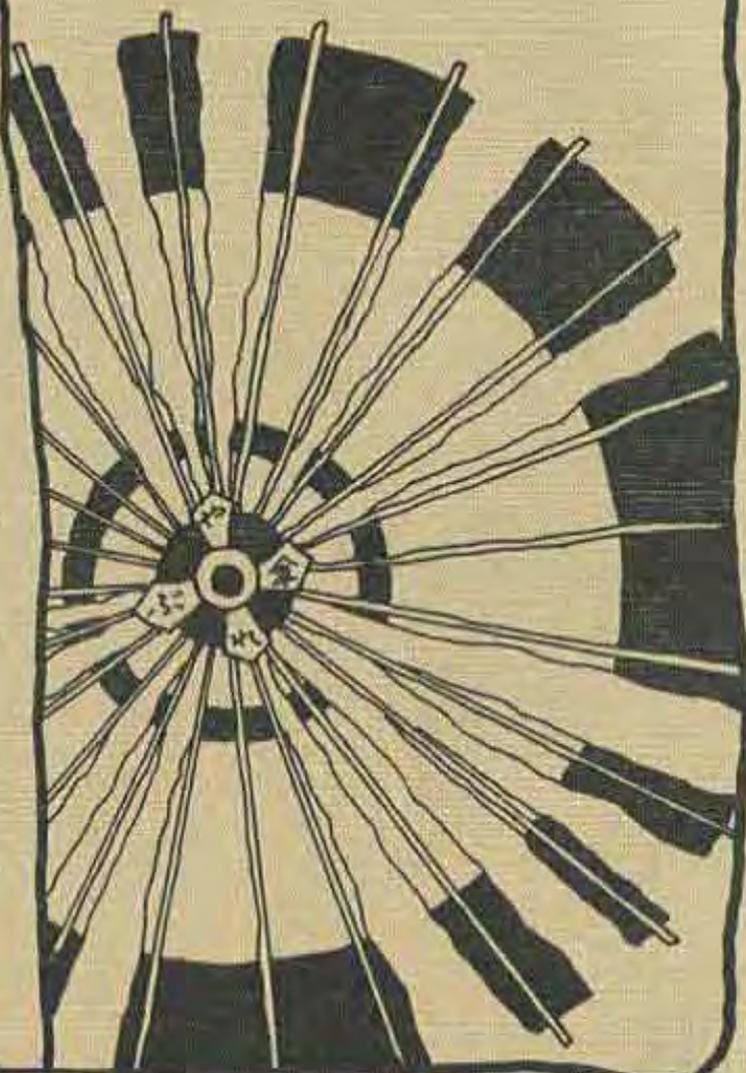


やぶれ傘



九十三号

二〇一六年十二月

| | |
|-------------------|--------|
| 洋梨を二つ離して置いてみる | 根橋宏次 |
| 北空がめうに明るい雪もよひ | 大島英昭 |
| 七度目の霜月母の靴捨てる | きくちきみえ |
| 干したシャツが風によじれる冬の薔薇 | 藤井美晴 |
| チエリストの楽屋口より出る夜寒 | 丑久保勲 |
| 野路行けば膝の高さに赤とんぼ | 廣瀬雅男 |
| 裏道は昔のまんま秋時雨 | 小山陽子 |
| 焼き栗とモーパッサンの短編と | 青谷小枝 |
| 頂上のひとりの昼餉秋の雲 | 白石正躬 |
| 駅前の更地に蛇口赤のまま | 瀬島洒望 |
| 釜底におこげのたん冬隣 | 天野美登里 |
| 一枚は刈られる前や鳥威し | 渡邊孝彦 |
| 店仕舞ひ早き巢鴨へ小六月 | 安藤久美子 |
| 塗り文箱に螺鈿のもみち初時雨 | 有賀昌子 |
| これよりは父の生地や蝗とぶ | 秋山信行 |

抄 集 句 傘 れ ぶ や

大 崎 紀 夫 選

| | |
|-----------------|-------|
| 山里のどの家も軒に干大根 | 菊池洋子 |
| 黄落の音なき音を聴くベンチ | 久世孝雄 |
| ハナミツキ秋は紅き実光らせて | 松村光典 |
| 秋の日を座敷に上げて午後一時 | 武藤節子 |
| 風呂釜の湯焚きの音と虫の音と | 泉 一九 |
| 若ければ走つた筈が秋時雨 | 岩藤礼子 |
| 垂れ下がる裸電球菊花展 | 大野芳久 |
| 秋うららヒールの高き靴を履く | 岡田香緒里 |
| 秋暑し老人ホームフェスティバル | 黒木東吾 |
| 焙じ茶のぬくもりを掌に暮の秋 | 齋藤朋子 |
| ゆらゆらと朝方のなみりんゴむく | 鈴木昌子 |
| 秋日差傾く杭に亀登る | 時田義勝 |
| 潮の目の動かぬ小昼とろろ汁 | 貫井照子 |
| ドラゴンの田んぼアートや豊の秋 | 萩原久代 |
| 中天にうつすらと月嶋の昼 | 松本正生 |

団栗独楽

大崎紀夫

大き石榴に手が届くかも知れず
子ら遊びしか藁塚のやや傾ぎ
団栗の散らばるあたりより日向
自動車の折り返しゐる草の花
鶏頭がひとつしばらく行つてまた

ダンプカー空荷でゆけり草の花
その辺にありしどんぐり独楽まはす
うろこ雲土手にのぼれば川が見え
俎板が干され近くに秋の蠅
枯蘆に風のきてゐる舟溜り
ほろ酔ひの身を囲炉裏よりやや離す
笹鳴きはどぶ川沿ひの竹藪に

洋梨

根橋宏次

菊芋の群れて踏切かんかん
と
青蜜柑三等賞の子に渡す
秋夕焼豆腐を買ひにゆくところ
草は穂に橋に上がれば山近く
この辺の雀おほかた蛤に
洋梨を二つ離して置いてみる
今年米海坂藩の話など
朝市の仕舞ひながらに売る柚餅子
花八つ手玄関口で押すはんこ
煮凝の四角いものが二つほど

尾花

大島英昭

うろこ雲ほどよき風と変はりけり
秋日差し一矢をはなつまで長し
手の届く尾花に触れてみたりけり
三差路の右は石橋赤のまま
秋ざくら鴉は屋根に止まりけり
川魚の料理屋菊が三鉢ほど
小春日の蝶たちまちに屋根あたり
草枯れて役行者の石碑など
北空がめうに明るい雪もよひ
雲少し増えてきたかも枇杷の花

霜 月

きくちきみえ

鉦叩き鳴き始めたる金曜日
トラツクのバックで上る赤のまま
一合の米に零余子のひとつかみ
冬晴れの工事現場に命綱
マンションの二階三階柿を干し
黄色い落葉赤い落葉と掃かれぬる
パンパンに落葉の詰まる護美袋
極月のジエツトタオルは音をたて
焼き栗のポんと弾けて失せにけり
七度目の霜月母の靴捨ててる

藁 塚

藤井美晴

いちいの木わづかに揺れて実が見えて
学校の方に運動会のことゑ
鴟三こゑ電車ゆく音絶え間なく
ラーメンをすする川端柳散る
薄雲がゆくえごの実は鈴生りに
アパートの軒端軒端の柿すだれ
不揃ひな小さき藁塚五つ六つ
手作りの小屋に大根売つてゐる
おでん喰ふプレスリーなど聞きながら
干したシャツが風によじれる冬の薔薇

夜 寒

丑久保勲

読み止しに文鎮を置く夜長かな
植木屋が栗羊羹をつまむ午後
引出しの把手に輪ゴムかけて秋
天高し進水船の赤き舵
釣台の空きゐる岸辺秋桜
チェリストの楽屋口より出る夜寒
「アマポーラ」流るる街の秋暮れて
蟋蟀の骸を外へ掃き出して
美術館図書館やすみ冬立つ日
蜜柑山のみかんの下に墓三基

赤とんぼ

廣瀬雅男

野路行けば膝の高一に赤とんぼ
鯉跳ねてぽちやんと川の暮れにけり
あけび熟れ遠くの山に雲ひとつ
煎餅屋の暖簾の下に菊の鉢
煙立つ山を近くにななかまど
地酒酌む紅葉の下の石に座し
がまずみや山の社に鳥の声
角のポストに吹き溜る落葉かな
学校の一部屋灯る夕時雨
雪催ひゴリラは子供のみ元気

冬 菜

小山陽子

公園に知る人の居て秋の空
大池は敗荷だらけ日は西に
長き夜にペンのインクのまた切れる
秋時雨いつもと違ふ家の匂ひ
寝る姿勢うまく決まらぬ夜寒かな
裏道は昔のまんま秋時雨
冬浅し振ればまだある化粧水
凧や夜中のやうな午後八時
俎板に残る冬菜の切れつ端
小夜時雨道はわづかに上り坂

焼き栗

青谷小枝

焼き栗とモーパッサンの短編と
草の花野川に手すり低き橋
十三夜ジャズシンガーの黒づくめ
まづ水で食ふ新蕎麦のうすみどり
秋冷や毛抜きの先のピシと合ふ
車座へ鍋ごと鱈の白子汁
冬ぬくし削りて使ふ黒砂糖
小春日のふらりと入るベーカーリー
手袋のまま立ち飲みのコーヒー屋
おでん酒書類カバンを股挟み

秋の雲

白石正躬

頂上のひとり
の昼餉
秋の雲
秋深む
利根川の土手
一歩づつ
新米をとぐ
音聞こえ
鼻歌も
暮れなづむ
土手に雁数へ
みて
船で行く
川中に秋惜し
みけり
青北風や
岸の渡船の
軋みゐて
背丈より
伸びしコスモス
刈りにけり
一斉に
水面をたたき
鴨の翔つ
寝ころがる
犬の眼が
向く小春かな
雨やんで
川辺は
北風の
来る気配

赤のまま

瀬島洒望

銭湯の自転車置き場紅芙蓉
草庵を模したる蕎麦屋吾亦紅
蝮姑の鳴く鐘楼脇に溜り水
駐在所前の田んぼに稲架組まれ
幾重にも桜落葉が車庫の屋根
駅前の更地に蛇口赤のまま
人形の巡查立つ道赤のまま
パトカーの尾灯に従いて霧の道
凭るると傾ぐ板塀次郎柿
坂下の交番前に降る落葉